

今堀誠二『原水爆時代』再読

——一九五二年「原爆記念全国平和会議」の位置づけを中心に——

黒川伊織

本稿の課題

中国史研究者であり、原水禁運動の担い手としても活躍した今堀誠二が著した古典的名著『原水爆時代』（三一新書、一九六〇年）は、占領下／朝鮮戦争下の広島における平和運動の展開を同時代史的に叙述したものとしてみ高い。しかし、私は、占領下／朝鮮戦争下の広島における左派の抵抗を跡づける作業に取り組んできたなかで（黒川二〇一〇、二〇一三）、今堀の叙述に違和感を抱くようになった。その違和感は、第一に、左派の運動を前景化して叙述していること、第二に、当時の左派の運動の重要な担い手であった朝鮮人の運動経験を意図的に除外して叙述していること、の二点にある^①。

そもそも、『原水爆時代』とは、第五福竜丸事件（一九五四年）を画期とする原水禁運動の高揚のなかで成立したテキストである。その限りで、今堀の叙述が原水禁運動の方向性に枠づけられていたことは否定できない。しかし、『原水爆時代』の刊行から

半世紀が経ち、もはや冷戦も過去の遺産となった現在、今堀の叙述の立場性を相対化することは当然の前提となっている（川口二〇一四、宇吹二〇一四など）。

そこで、本稿では、占領下／朝鮮戦争下の広島における左派の抵抗のひとつの到達点となった「原爆記念全国平和会議」（一九五一年八月六日開催、以下「会議」とする）についての叙述を、今堀『原水爆時代』と、同時代のルポルタージュによって比較する作業を行い、今堀の叙述の特質を確認していく。そのうえで、同時代の文脈のうちに今堀の叙述を差し戻し、『原水爆時代』の批判的再読の手がかりを提示してみたい。

一 今堀誠二『原水爆時代』における「原爆記念全国平和会議」の語り

「会議」については、はじめてまとまったかたちで言及したのは、前述した今堀による同時代史的語りである。まずは、同書一一一頁から、「会議」の様子を引用しておこう。

広島市荒神小学校講堂で開かれた原爆記念全国平和会議には、東京から九州に至る一四〇団体の代表一、三四二人が詰めかけた。会場の出入口には、青年行動隊が机をもち出してバリケードをきずき、嚴重な防衛体制をとっていた。……報告が済み、討論に入ると、共産党の主流（鈴木市蔵・亀田東伍）、国際（内藤知周）両派の激しい論戦がおこなわれた。その場の大勢は国際派に有利であった。峠三吉氏が原爆詩集を大会にささげた時、深い共感で会場はどよめいた。……感激の拍手が嵐のようにつづき、平和への決意はすべての来会者の眉宇にあふれていた。インターの大合唱と大会万才で会をとした。

ここに引いたように、今堀は「会議」を、共産党の主流派と国際派の対立関係の極点として位置づけている。一九五〇年一月のコミンフォルムによる日本共産党の平和革命論批判（コミンフォルム批判）に端を発する共産党の「五〇年分裂」は、徳田球一ら党主流（＝主流派＝所感派）と、それと対立する少数派（＝国際派）の激しい党内対立として知られる。一九五〇年六月二五日に朝鮮戦争がはじまると、ストックホルム・アピール署名運動などの国際的な平和擁護運動に積極的に呼応してきた国際派の人々は各地で公然と朝鮮戦争に対する反対運動を展開して、主流派からの激しい批判にさらされることになる。同年八月半ばに主流派が掌握する日本共産党臨時中央指導部は国際派の党員を除名し、党内対立はもはや修復不可能な事態にまで陥っていた。そして広島は、

国際派の最大拠点として、主流派と公然と対立しながら果敢に反戦平和運動を続けていたのである（詳しくは黒川二〇一〇、黒川二〇一三）。

このような政治的対立が一応「克服」されたのは、一九五五年の日本共産党第六回全国協議会（六全協）の開催によってであり、今堀が『原水爆時代』を著した五〇年代後半にあつて、このような政治的対立の傷跡はいまだ生々しかった。しかも、今堀は『原水爆時代』を著すにあたって、「会議」を主催した国際派の共産党員である松江澄・泉谷甫から聞き取りを行つており（同書「あとがき」、泉谷一九九五）、「会議」についての同書の語りは、国際派の立場に親和性が高いと言つてよい。

そのような立場にある今堀の語りに依拠して「会議」を主流派と国際派の対立の舞台―しかも国際派が優勢であつた場―と見るのは一面的な評価の仕方であるかも知れない。このような疑問を踏まえて、本稿では、「会議」の参加者が速報的に著した「会議」のルポルタージュを紹介していくことにするが、まずはその掲載誌である新日本文学会神戸支部機関誌『足音』について触れておこう。

二 新日本文学会神戸支部と平和擁護運動

新日本文学会神戸支部機関誌『足音』は、一九五一年八月にただ一号だけ発行されたガリ版刷り全三四頁のサークル誌である。神奈川近代文学館野間宏文庫に一冊だけ所蔵されている同誌の現物を提供してくださった詩人・直原弘道氏（元・新日本文学会神

戸支部)に深く感謝申し上げる。

一九四〇年代末に『新日本文学』購読者の集いとして出発した神戸支部は、コミンフォルム批判を受けて国際派支持を明確にして、主流派組織と激しく対立していた。そのようななか朝鮮戦争が勃発して、神戸港からは朝鮮に向かう兵員や物資が送り出され、かつての軍需工場は朝鮮戦争で破損した艦船の修理にあたるなど、神戸の街は朝鮮戦争の国内最前線基地の一つとして戦争遂行に組み込まれていたのである(黒川二〇一四b)。

このように緊張を抱え込んだ神戸の街で、文学を通じて平和に貢献しようとした神戸支部の人々は、レッド・パージによる鹹首や主流派組織からの圧力に耐えて、一九五一年四月には機関誌『文学通信』を発刊して果敢に反戦平和運動を続けていた(黒川二〇一四b)。「文学通信」後継誌として同年八月に発行された『足音』の表紙を見ると、ロシア語・英語・エスペラント語・中国語・フランス語・日本語および朝鮮語の「平和」が並べられ、その背景に赤旗があらわれるなど、国際的な平和運動の強い影響を見てとることができる。「足音」に掲載された作品のすべてが、反戦平和運動の担い手として神戸で地道な活動を続ける無名の書き手によるものであり、ストックホルム・アピールやベルリン・アピールの署名集(平和署名)に材をとった作品や、神戸空襲の経験を描いた作品など、三度目の原爆使用が懸念された時代性を象徴する誌面となっている。

そのような誌面の中に、本稿で紹介するルポルタージュ「原爆記念全国平和会議に参加して」は四頁の紙幅を占めている。その作者である宮原喬は、当時の神戸支部の主要な担い手の一人で

あった。神戸支部は、広船をレッド・パージにより鹹首された幡多和夫のちに神戸に移ってその中心メンバーの一人となったという経緯もあり(直原氏による)、広島での反戦平和運動に共鳴するところがとくに大きかったかもしれない。宮原をはじめ神戸支部の代表七名は、関西からの代表一行とともに、八月六日の早朝、会場の荒神小学校に到着したのである。

三 ルポルタージュ「原爆記念全国平和会議に参加して」を読む

荒神小学校に到着した宮原ら神戸支部代表は、「午前中の大会が禁止」されているため、午前中にベルリン・アピールの署名集めに広島市内の担当区域を廻り、午後一時過ぎに開会した「会議」に参加した。宮原は次のように会場の様子を描き出す。

第六回原爆記念全国平和会議は午後一時過ぎ開会された。会場荒神小学校は(イスをいれると狭くなるので床に坐るようになっていた)。正面にアカハタ、労組旗、反戦旗、三つのスローガン——一、原爆を再びおとすな、広島の悲劇をくりかえすな。二、対日講和準備のため米ソ英中四ヶ国の会議を開け。三、世界の恒久平和樹立のため米ソ英中仏五大国の平和条約を結べ。——がかかげられ、うだるような暑さの中に参加者が一杯つまつた。外にあふれている大勢のために幾度か前へ詰めたのにまだあふれている人も多かった。

前引した今堀の語りでは、「出入口には、青年行動隊が机をも

ち出してバリケードをきずき、嚴重な防衛体制をとっていた」とされるが、宮原の記述からはこのような緊張感を感じられない。「会議」は、主催者代表（広船労組委員長）の挨拶、司会者（国労）の挨拶、議長団、大会役員、書記の選出ののち、参加した各組織の代表からメッセージの朗読が行われた。以下、宮原の記述を引用しておく。

一、平和ヨーゴ日本委員会代表の要旨

現代の世界はソヴェートの平和を守る力で動かされている。朝鮮の開城会談もソヴェートの提案によって開かれている。これはベルリン・アッピールの一つの現れといえる。五大国がそれぞれ違った形ではあるが集って会議している。これらのことは平和の力が世界を動かすということである。我々は今日の会議で平和の土台を作ろう。

一、東京平和の戦士団代表阿部行蔵氏の要旨

今日世界には平和と戦争とがある。その平和を云う中には二七物がある。我々は正しい平和を闘いとらねばならぬ。我々は人民の平和のために団結し、命をすてて闘おうではないか。

一、慶応大学平和ヨーゴ委員会

一、朝鮮人団体代表

一、朝鮮少年団代表の要旨

アメリカ帝国主義の陰謀に対し朝鮮人民は徹底的に闘う。日本については単独講和、サンフランシスコ会議を粉砕し世界平和を守りましょう。

一、日本共産党臨時中央指導部鈴木市蔵氏の要旨

ストックホルム・アッピールで原子爆弾を止めたが我々は更に日本の単独講和、サンフランシスコ会議を粉砕せねばならぬ。五大国の平和会議を要求しよう。

一、青年祖国戦線代表

一、青年学生平和祭準備会代表

一、全学連中央執行委員会代表の要旨

広島におとした原爆が必要があつておとしたのではない。これはアメリカの報道でも云つている。カイロ宣言によりソヴェートが対日参戦し、進駐して来るのを恐れたアメリカの陰謀家によつておとされたのだ。そのときからアメリカは日本の軍事基地化を狙つている。

一、東京平和会議代表

一、全面講和愛国運動協議会代表

一、新日本文学会代表壺井繁治氏の要旨

私は市の慰霊祭に行つておどろいた。広島に原爆をおとし、朝鮮出兵五十回以上のアメリカの勇士二十数名が来ている。人殺しをやっているそれらの勇士の出席を人々はどうかんじ、これは一体どういうことだろうか。次に私は総評の平和祭に行くと、入口で一般の人はいれないといつて説明している。つまり我々の全国平和会議こそが真に平和を守るものである。

一、労農党広島支部委員長

一、中国地方反戦青年同盟代表

一、日本共産党関西地方統一委員会代表

一、婦人民主クラブ広島支部代表の要旨

私たちは父を夫を子を再び戦争で殺させない。物価が上り私たちの苦しめられる戦争を防ぎ平和を守るため闘いましょう。

一、日本共産党中国地方委員会委員長の要旨

進駐してきたアメリカ軍を解放軍とした誤った設定及びそれ以来の党の政策を自己批判し、その上に立って分裂している党を統一し、サンフランシスコ会議を實力をもって粉碎すべきである。そうして国際的連携、五大国平和条約を闘いとれ。

一、浜井広島市長のメッセージ代読

一見してわかるように、共産党国際派の組織（日本共産党中国地方委員会、日本共産党関西地方統一委員会）とその学生組織（全学連中央執行委員会、中国地方反戦青年同盟など）や大衆団体（新日本文学会など）からの代表が圧倒的多数を占め、しかも共産党主流派の組織（日本共産党臨時中央指導部）からの代表も参加していることから、「会議」を主流派と国際派の対立の極点に位置づける今堀の語りにも根拠があることが了解される。

しかし、より重要なのは、「会議」に「朝鮮人団体」および「朝鮮少年団」―おそらく在日朝鮮統一民主戦線（民戦）とその下部組織―が参加しているということである。繰り返し指摘してきたように、占領下／朝鮮戦争下の広島で左派の運動のかなりの部分を担っていたのは、左派の朝鮮人であった（黒川二〇一〇、二〇一三）。しかし、原水禁運動が「国民化」したのちの地平から五

〇年代前半の運動経験を切り出した今堀の語りにおいて朝鮮人の運動経験は抹消されており、今堀はまさに「ナショナルな記憶」として占領下／朝鮮戦争下の抵抗を描き出したと言つてよい。しかも、引用の最後には、朝鮮戦争の勃発以来激しい弾圧を受けてきた共産党とは真つ向から対立する立場のはずの浜井信三・広島市長からのメッセージが代読されたことあり、これが事実であるかは、もはや現時点では確認のしようもないけれども、「会議」を共産党内の激しい路線対立に還元してきた今堀の語りによって一定の留保が必要なことは了解されるだろう。

すべてのメッセージ朗読が終わった時点で、すでに「会議」がはじまって三時間近くが経過していた。その後も討議は続き、会場の使用許可時刻の午後七時近く、次のような光景のなか、六時間にわたる「会議」は終わりを迎えた。

植民地が独立か、平和か戦争かの危機に立つ日本での歴史的なこの会議も終りに近づいた。各地方へ帰つて更に強力な平和ヨーゴを闘う決意をこめて結語がのべられた。中国の各地から参加していた朝鮮の人々へ友好と激励の拍手が強く強くなりひびいた。やがてスクラムががちり組まれ、久しぶりのインター大合唱の壇上ではいわゆる主流派の人も国際派の人もそれらに関係のない人も、共にスクラムを組んで唄っていた。

ここにも、「中国（地方―引用者）の各地から参加していた朝鮮の人々」の姿がある。そして、宮原が、「いわゆる主流派の人も

国際派の人もそれらに関係のない人も、共にスクラムを組んで「インター」を歌っていたと記録したことは、今堀の語りから受ける印象とは相当距離がある。「会議」を主流派と国際派の対立の極点とする今堀の語りからは、「それらに関係のない人」の存在感を見出すことはできないし、「共にスクラムを組んで」インターを歌うことなど想像もできない。しかし、「平和か戦争か」が切迫感をもって突きつけられた当時においては、「主流派の人も国際派の人もそれらに関係のない人」もみな「スクラムを組んで」平和を守るほかなかったはずだ。たしかに当時の共産党内部の政治的対立は激しさを増すばかりであったが、しかし、平和を旗印に人々が結集したこの日、政治的対立も民族の区別もこえた（平和）な場が被爆地・広島の間隙に生まれていたことは、今堀の語りを離れて、確認されねばならない事柄であるだろう。

ここで注意を促しておきたいのは、宮原のルポルターージュからは、峠三吉『原爆詩集』がこの「会議」に「ささげ」られた形跡が全く読み取れない、という点である。『原爆詩集』は完成直後にこの「会議」に「ささげ」られ、直後の九月二〇日付で新日本文学会広島支部われらの詩の会によりガリ版刷りで発行され、のち青木文庫に収められた、とされている。「会議」に『原爆詩集』を間に合わせたことは間違いないとしても、実際の「会議」の場において『原爆詩集』の印象は、少なくとも他県からの参加者にとっては薄かったのかも知れない。『原爆詩集』がひろく受け止められようになるのは、『新日本文学』一九五一年一月号にその抄録が掲載されて以降のことだと考えてよいだろう。

おわりに

——「ナショナルな原水禁運動」の向こう側にいた朝鮮人——

本稿では、一九五一年八月六日に広島で開催された「原爆記念全国平和会議」の議事進行を、同時代のルポルターージュに即して跡づけてきた。この作業により、「会議」についての通説的把握を生んだ今堀誠二『原水爆時代』の語りが、当時の共産党の激しい内部対立の文脈に「会議」の性格を誘導するとともに、「会議」の重要な担い手であった朝鮮人の存在を抹消して成立していることを明らかにした。

問題は、なぜ一九六〇年の時点での今堀が、このようなかたち——共産党の内部対立を前景化し、朝鮮人の存在を抹消するかたち——で『原水爆時代』を著さねばならなかったのかということにある。もちろん、「ナショナルな原水禁運動の興隆」のなかで一国的視野に今堀の関心が収斂したことが叙述に決定的な影響をおよぼしているのだが（川口二〇一四）、そのような「ナショナルな原水禁運動の興隆」を促すことになった社会運動の構造的変容と、それに伴う歴史叙述の方法的転換に、本稿では注意を促したい。すなわち、一九五五年に左派朝鮮人の運動が共産党から組織的に分離されて、一九二〇年代初頭にはじまる一国一党主義が清算されたのち、ここで切り分けられた「朝鮮人／日本人」という枠組を適及的に適用するかたちで、これ以降の社会運動史の叙述がなされるようになったということである。その結果、朝鮮人の運動経験は、「日本の」社会運動史の対象から除外され、朝鮮人の経験が日本の一国的な社会運動史のなかで顧みられることはほと

んどなくなっていく(黒川二〇一四a)。日本の一国的な社会運動としての六〇年安保闘争の高揚のなかで著された『原水爆時代』もまた、このような限界性を無自覚にはらんで成立したテキストであるにほかならず、結果として『原水爆時代』は、朝鮮人を「ナショナルな原水禁運動」の向こう側に押し込めてしまうことになったのである。

そして、一九五一年八月六日に「ナショナルな原水禁運動」のなかにいた朝鮮人の存在がふたたび可視化されたのは、かつて今堀の執筆に協力した松江澄の回想によってであった(松江一九九五)。しかし、松江は、一九六一年に共産党を離党した直後に著した回想(松江一九六五)では、占領下／朝鮮戦争下ともに運動を担った朝鮮人の存在についてまったく触れていなかった。三〇年の時を経て、なぜ松江は朝鮮人が存在していたことに言及したのだろうか。このような松江の思想的変化を解き明かすことは、一国一党主義を清算したのちの日本の左派が、朝鮮人とふたたび出会っていく過程を跡づける作業であると言つてよい。

そのような出会いの画期となったのは、一九六〇年代後半から一九七〇年代であるだろう。一九六〇年代後半からは核禁会議などによる在韓被爆者への医療支援がはじまり、密入国してきた在韓被爆者・孫振斗(一九七〇年逮捕)の問題がクローズアップされ、在韓被爆者への被爆者健康手帳の交付を求める裁判闘争がはじまるのも一九七〇年代前半のことである。一方、占領下／朝鮮戦争下での抵抗を担った一人である深川宗俊も、この時期に、被爆した朝鮮人徴用工の問題を自らの問題として捉えなおしている(深川一九七四)。このようにしてこの時期に日本の左派が朝鮮人

の運動と出会いなおしていったさまを跡づけることを、今後の課題としたい。

注

1 たとえば、一九五〇年八月六日に広島市の福屋百貨店などで起きた朝鮮戦争への反戦ビラ配布事件をめぐる今堀『原水爆時代』の語りは(同書六二―六七頁)、事件で逮捕された朝鮮人の存在に言及することなく(詳細は黒川二〇一三)、国際派が「ただ一人の犠牲者も出さなかった」と事件のあらましを伝えている。このような叙述は、本文で指摘したように左派の運動経験を前景化し、朝鮮人の運動経験を除外したものと象徴的である。

2 松江によると、「あまり知られていない占領下から朝鮮戦争時の運動についてその正確な記録をとどめることは、文書として残っているものが少ないだけに早くから求められて」おり、占領下から朝鮮戦争時の運動をリードした「共産党中国地方委員会」が「六全協後まもなくこの歴史をまとめることを決定」して、「この運動の中心的な位置にいた」松江を「責任者に任命」したという。しかし、「目の前の運動に追われて」まとめることのできなかった松江は、のちに今堀から協力を求められた際、今堀に「知っている限りの事実と資料の拠り所を提供」して、『原水爆時代』が著されることになったと回想している(松江一九六五)。

参考文献

泉谷甫一九九五 「占領下の反原爆・平和の機関紙活動」渡辺力人・田川時彦・増岡敏和編『占領下の広島―反核・被爆者運動草創期も

のがたり―』日曜舎

今堀誠二一九六〇『原水爆時代―現代史の証言―(下)』三一新書

宇吹暁二二〇一四『ヒロシマ戦後史―被爆体験はどう受けとめられて

きたか―』岩波書店

川口隆行二二〇一四『『われらの詩』と朝鮮戦争』『日本学報』第三三

号

黒川伊織二二〇一〇『峠三吉「墓標」と一九五〇年夏の広島』『原爆

文学研究』第九号

黒川伊織二二〇一三『「まいおちるピラ」と〈腐るピラ〉―朝鮮戦争

勃発直後の反戦平和運動と峠三吉・井上光晴―』『社会文学』第三

八号

黒川伊織二二〇一四 a 『帝国に抗する社会運動―第一次日本共産党の

思想と運動―』有志舎

黒川伊織二二〇一四 b 『朝鮮戦争・ベトナム戦争と文化／政治―戦後

神戸の運動経験に即して―』『同時代史研究』第七号

深川宗俊一九七四『鎮魂の海峡―消えた被爆朝鮮人徴用工二四六名

―』現代史出版会

松江澄一九六五『二共産主義者の体験』『マルクス主義』(社会主義

革新運動全国委員会)第一六号(のち松江一九八四に再録)

松江澄一九八四『ヒロシマから―原水禁運動を生きて―』青弓社

松江澄一九九五『ヒロシマの原点へ―自分史としての戦後五〇年―』

社会評論社

付記 本稿は科学研究費補助金(若手研究(B)24720036)による研

究成果の一部である。